

# 夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』訳注(二)

井 澤 耕 一

## 要旨および凡例

- 一、本訳稿は清末民国期の学者夏曾佑(一八六三—一九二四)が、光緒三十年(一九〇四)から三十二年(一九〇六)にかけて出版した『最新中学教科書 中国歴史』全三冊のうち、第一冊・第二冊部分を全訳し注釈を加えたものである。本書全体では、人類の起源から魏晋南北朝までの歴史を記述している。夏氏は清末中国を席卷した「新学」を支持しており、そうなる本書は今文経学の観点から中国史を綴ったものだと考えられよう。訳注者は本論集において、古文経学者である劉師培著『中国歴史教科書』訳注も発表しており、以後、各書の訳注を交互に連載していく予定である。なお今回は第一篇、第一章の第三節「中国種族之原」、第四節「古今世變之大概」、第五節「歴史之益」部分を訳した。
- 二、『最新中学教科書 中国歴史』の本文は、楊琥『夏曾佑集』下巻(上海古籍出版社、二〇一一年)所収の校点本を底本とした。
- 三、本文と自注とを区別しやすくするために、本文は太字、本文中に挿入されている著者の自注は小字とした。また本節から(原注)が付されているが、見やすさを考えて節ごとにまとめた。

- 四、〔注釈〕では可能な限り本文中の引用文の出典を明らかにし、また本文および原注の誤りや不足に対して訂正、補足を行った。

- 五、本文及び注中の『』は書名を示すが、書名であるか否かの判断が困難な場合、書名に準ずるものにも使用した。(一)は訳者によるもので、術語の解説や意味の補足に用いた。

- 六、原文の表記には旧字体、訳文・引用文の表記には、常用漢字体、現代仮名遣いを用いた。

## 最新中學教科書 中国歴史 第一篇

### 第一篇 上古史

#### 傳疑時代

#### 第三節 中国種族之原

種必有名、而吾族之名、則至難定、今人相率稱曰支那。案支那之

稱、出於印度、其義猶邊地也、此與歐人之以蒙古概吾種無異、均不得爲定名。至稱曰漢族、則以始通匈奴得名、稱曰唐族、則以始通海道得名、其實皆朝名、非國名也。諸夏之稱、差爲近古、然亦朝名、非國名也。惟『左傳』襄公十四年引戎子駒支之言曰、「我諸戎飲食衣服、不與華同」。華非朝名、或者吾族之眞名歟。至吾族之所從來、尤無定論。近人言吾族從巴比倫遷來、據下文最近西曆一千八百七十七餘年後、法、德、美各國人、數次在巴比倫故墟掘地所發見之證據觀之、則古巴比倫人與歐洲之文化相去近、而與吾族之文化相去遠、恐非同種也。其古事、附錄於後。

巴比倫有二種語、一南一北、南爲文言 (the pure language)、北爲婦人之言 (the woman's language)。西元前六千年之博文、凡書十二部。紀其國之古事、第一部云、無始之時、光明與黑暗相戰、於是有大神出其間、名彌羅岱 (Merodach)。當此之時、又有一龍底麥得 (Tiamat)、與神爲敵、神以大力礮龍而分之、其首爲天、尾爲地。第十一部言二大神、一名吉而葛莫斯 (Gilgames)、一名衣本尼 (Ea-bani)。上帝造衣神、本令其殺吉神、不料二神結爲死黨。二神協力殺一惡神、名克母伯 (Khumbaba)、此惡神本住一奇怪杉樹之下。又殺一神牛、因殺神牛、遂有洪水之禍。後衣神忽死、而吉神又患重病、此病惟一神能醫之、神住死水之外、名西蘇詩羅斯 (Xisuthros)。吉神往就醫、從阿拉伯經過一日落之山、此山上本歸一種怪人名蠟人者保護。海邊有樹、以寶石爲果。又行四十五日而至死水、死水之中有羣島、有一島名福島、於此島望見西神、西神始告以造洪水之故、又以生命樹一枝授之。吉神即攜樹

歸巴比倫、于路偶渴、就泉而飲、泉中有一蛇出、竊其生命樹、吉神大哭而無如何也。又大神彌羅岱、以土造人。第一人曰愛特巴 (Adapa)、偶因釣魚、誤折南風之翼。南風訴之於天、天神愛牛 (Anu) 召愛特巴而問之。有神名醫 (Ea)、謂愛特巴曰、「愛牛神處之物、不可飲食」。愛特巴遂不敢飲食、於是其子孫無不死者矣。蓋愛牛之飲食、皆能使人不死者也。又有神納格爾 (Nergal)、欲謀殺一女神名愛來得 (Allat)。女神乃與之商、以地球上之權悉讓之、遂得不死、而女神爲陰司之神。又有神名衣登腦 (Etanna)、與鷹相商、欲至天至高之處、已過愛牛之室、又至一斯他 (Ishtar) 之室、鷹力已竭、遂棄於地上。有神司風潮、名蘇 (Nu)、竊彌羅岱定數之簿、而彌羅岱之權遂失、久之始得奪回。巴比倫女子可受父母之遺產。在公庭、父子平權。奴隸亦有財產與訟獄之權。無用刑訊之事、又以誑言爲重罪。商法甚詳。教育普及。女子亦講學問。郵信極多。已知日月食。創十二宮。休息之日、以度歲爲至要、倍爾神升座行福故也。人皆平等自由。供神之物、分爲二種、有血者肉類、無血者香酒等類。稅取十分之一以與廟。商亦最重、帝王亦經商。貨資有至二十分者、後減至十三分半。以金、銀、銅三種條爲幣、一金門尼爲六十悉克爾。

#### (原注)

(一) 譯英文『圖書集成』巴比倫古事。

## 〔現代語訳〕

種族には必ず名称があるが、わが民族の名称については、極めて定め難いので、今ではおおむね「支那」と称している。思うに支那という名称は、インドに由来しており、それは「(インドから見て) 辺境の地」を意味している。<sup>(1)</sup> これはヨーロッパ人がわが種族を蒙古(すなわちモンゴロイド)として概括しているのと変わりない。(支那も蒙古も) 固定の名称とはいえない。<sup>(2)</sup> 漢族と称されたことについては、最初匈奴を通じてその名が知られ、唐族と称されたことについては、海や陸の交易路を通じてその名が広まったのだが、実際は共に王朝名であって、国名ではない。諸夏の名称は、時代によって差があるが、それも王朝名であって、国名ではない。ただ『左氏伝』襄公十四年所引の戎子駒<sup>くし</sup>支の言では、「我が諸戎の飲食・衣服は、華とは異なっている」となっている。この華は王朝名ではなく、もしかするとわが民族の本当の名称かもしれない。わが民族の発祥については、とりわけ定説がない。最近の学者はバビロニア(すなわちメソポタミア)の地から移ってきたと主張したが、<sup>(3)</sup> 近年一八七〇年以降、フランス、ドイツ、アメリカなど各国の学者が、幾度にわたりメソポタミアの遺跡で発掘した成果によれば、<sup>(4)</sup> メソポタミア人はヨーロッパ文化と近いが、我が民族の文化とは遠く隔っており、おそらく(メソポタミア人と我々)は同種ではなかった。古代メソポタミアについては以下述べる通りである。

メソポタミアには二種の言語があり、それは南北に分かれ、南は文言(the pure language)、北は婦人語(the woman's language)で

ある。<sup>(5)</sup> 紀元前六千年の粘土板には、全十二部。かの地の古代の出来事が刻まれている。

第一部では、何もなかった時代、光と闇が戦い、そこで大いなる神、マルドゥク(Merodach)が生まれた。当時、龍の姿をしたティアマト(Tiamat)がマルドゥクと争っていたが、神はその大いなる力で龍神を倒してその遺体を裂き、ティアマトの頭が天、尾が地となった。<sup>(6)</sup>

第十一部は二人の神、ギルガメシュ(Gilgamesh)とエンキドゥ(Eabani)の話である。天帝はエンキドゥを造り、ギルガメシュを殺すように命じたが、二人はなんと親友同士となった。彼らは力を合わせて悪の神、フワワ(あるいはフンババ、Khumbaba)を殺したが、この悪の神はもと奇怪な杉の樹の下に住んでいた。さらにギルガメシュとエンキドゥは天の牡牛を殺したが、それを殺害したことにより、洪水の禍に遭ってしまった。そして後にエンキドゥは(天罰を受け)急死し、ギルガメシュも重い病となったが、たった一人の神だけがそれを治すことができた。その神は死の海の外に住み、名をウトナピシュティム(あるいはジウストラ、Xisuthros)といった。ギルガメシュは彼を訪ねる旅に出て、アラビアから一日後ある山にたどり着いたが、その山は「サソリ人間」によって守られていた。また海辺には寶石のたわわに実る樹が生えていた。さらに行くこと四十五日にして死の海にたどり着いた。そこには多くの島々があり、そのうちの一島は「幸福の島」と呼ばれていた。ギルガメシュはそこでウトナピシュティムに会ったが、そこで神は洪水

の話をし、さらにギルガメシュに生命の樹の枝を授けた。ギルガメシュはそれをバビロニアに持ち帰ろうとしたが、その途中のどが渴いたので泉で水を飲んでみると、泉の中から蛇が上がってきて、その樹を盗み取ってしまった。ギルガメシュは号泣したがどうしようもなかった。<sup>7)</sup>

大いなる神、マルドゥクは粘土で人を造り、一番目をアダパ (Adapa) とした。彼がたまたま釣りをしていた際、誤って南風の精の翼を折ってしまった。風の精はこれを天に訴えたため、天の神アヌ (Anu) に呼び出られた。その際エア (Ea) という神がアダパに「アヌが出すものを決して口にしてはならぬ」と申し渡した。そのためアダパは食べることを拒んだが、結果その子孫は不死の者とはならなかったのである。おそらくアヌの出した食べ物は、人を不死の者とするのであったのであろう。<sup>8)</sup>

ネルガル (Nergal) は女神アラトゥ (Allat) を謀殺しようとしたが、女神は和を乞い、冥府の支配権を譲り、かくして彼は不死となり、また女神は冥界の神となった。<sup>9)</sup>

エタナ (Etanna) という名の神は、鷹と謀って、至高の天に行こうとし、アヌ、さらにはイシュタル (Ishtar) またはイナンナ (Inanna) の居所まで昇ったが、鷹が力尽き地上に墜落してしまった。<sup>10)</sup>

ズー (Zu) という名の風を司る神が、マルドゥクのもつ「天命の書板」を盗み出してしまい、そのためマルドゥクの権威は失われたが、しばらくしてそれを取り戻したのだった。<sup>11)</sup>

メソポタミアの女性性は両親の遺産を相続でき、法廷においては、

親子は平等であった。奴隷もまた財産所有と裁判の権利を有していた。拷問はなされず、偽証は重罪とされた。商法は極めて詳細で、教育も普及しており、女子も学問を修めていた。また通信も発達していた。彼らは日食・月食を知っていたし、占星術も創めたのである。休日については、年末年始を重んじていたが、それはバベルの神が神座に昇って福をもたらしたからである。人々は平等で自由でもあった。神に捧げる供物は二種類あり、血が出るものは肉類、血が出ないものは香酒などであった。また税金の一分は神廟に納められた。商業が最も重んぜられ、帝王も売買を行った。貸借に際しては最大二割の利息が徴収され、のちに最大一割三分に引き下げられた。金、銀、銅三種を貨幣とし、一ムナは六十シケルと等価値であった。<sup>12)</sup>

#### (原注)

(一) 英語版『図書集成』の古代バビロニアの項。

#### (注釈)

(1) 「支那」の語源については「秦」の国名が、周辺国に宣伝され、Chin, Sina, Thinaなどとよばれるようになり、それが漢訳仏典において「支那」や「脂那」と訳されて、中国に逆輸入されたとも考えられている。

(2) この種の批判については、本書第二節の注(3)において既述。

(3) 本文中の「最近の学者」とは、フランス出身の英国の東洋学者、アルベール・エティエンヌ・ジャン・バティスト・テリアン・ド・ラクペリ (Albert Étienne Jean-Baptiste Terrien de Lacouperie 一八四五—一九四) を指す。彼はその著『中国上古文明の西方起源 (Western origin of the early Chinese civilisation from 2,300 B. C.

10 200 A. D.)』において、漢民族及び中華文明が古代オリエン트에起源を発したと主張している。

(4) 一八七〇年、ドイツのシュリーマンがトロイ遺跡(イリオス)の発掘を開始してからの、古代メソポタミアに関する主な考古学的調査は、例えば、一八八七年、アメリカのペンシルベニア大学調査隊がシュメルの都市遺跡であるニップルを発掘し、大量の粘土板が発掘された、また一八九九年、ロベルト・コルデヴァイラドイツ考古学隊がバビロンの本格的な調査を行った、などが挙げられる。

(5) 南の言語は「楔形文字」で知られる「シュメール語」、北の言葉は「アッカド語」を指すか。

(6) 以上の記述はメソポタミアの創世神話である『エヌマ・エリシュ』に拠っている以下、岡田明子ほか『シュメル神話の世界―粘土板に刻まれた最古のロマン』中公新書、二〇〇八年、Th・H・ガスター『世界最古の物語―バビロニア・ハッティ・カナアン』平凡社東洋文庫、二〇一七年などを参考にした。

(7) 以上の記述はメソポタミアの英雄譚である『ギルガメシュ叙事詩』に拠っている。

(8) 以上の記述は『アダパの物語』、本神話は旧約聖書『創世記』に記された「アダムとエバ」に相似している、に拠っている。

(9) 以上の記述は「ネルガルとエレシュキガル」に拠っている。本文中の「アラトウ」はエレシュキガルのアッカド語名である。

(10) 本文では「鷹」となっているが、神話においてエタナを背に載せたのは鷹である。

(11) 本文では「天命の書板」の所有者をマルドゥクとしているが、神話では最高神エンリルの所有となっている。

(12) 旧約聖書『エゼキエル書』四十五章十二では「マネ」となっている。

(13) 本書は『ブリタニカ百科事典』を指すか。

#### 第四節 古今世變之大概

中國之史、可分爲三大期。自草昧以至周末、爲上古之世、自秦至唐、爲中古之世、自宋至今、爲近古之世。若再區分之、求與世運密

合、則上古之世、可分爲二期。由開闢至周初、爲傳疑之期、因此期之事、並無信史、均從羣經與諸子中見之、經、史、子之如何分別、後詳之。往往寓言、實事、兩不可分、讀者各信其所習慣而已、故謂之傳疑期。由周中葉至戰國爲化成之期、因中國之文化、在此期造成、此期之學問、達中國之極端、後人不過實行其諸派中之一分、以各蒙其利害、故謂之化成期。中古之世、可分爲三期。由秦至三國、爲極盛之期。此時中國人材極盛、國勢極強、凡其兵事、皆同種相戰、而別種人則稽顙于闕廷。此由實行第二期人之理想而得其良果者、故謂之極盛期。由晉至隋、爲中衰之期、此時外族侵入、握其政權、而宗教亦大受外教之變化、故謂之中衰期。唐室一代、爲復盛之期、此期國力之強、略與漢等、而風俗不逮、然已勝於其後矣、故謂之復盛期。近古之世、可分爲二期。五季、宋、元、明爲退化之期、因此期中、學殖荒蕪、風俗凌替、兵力、財力遂漸摧頹、漸有不能獨立之象。此由附會第二期人之理想、而得其惡果者、故謂之退化期。國朝二百六十一年爲更化之期、此期前半、學問、政治集秦以來之大成、後半世局人心、開秦以來所未有。此蓋處秦人成局之已窮、而將轉入他局者、故謂之更化期。此中國歷史之大略也。

#### 〔現代語訳〕

中国史は、三期に分けることができる。未開の時代から周末までが上古、秦から唐までが中古、北宋から現在までが近古である。

より細分して、時代の流れと密接に合致させようとするならば、上古は二期に分けられる。開闢から西周初までが「伝疑」期であ



る。この時代の出来事は、信頼すべき歴史が無く、経書や諸子よりそれが見い出されるが、経、史、子がいかに区分されるかについては後で詳述する。寓言と史実を区別することは不可能で、読者は各々の志向によって歴史を認識した、そのためこの時代を「伝疑」という。周の中葉から戦国までが「化成」期であり、中国の文化はこの時代に生み出され、学問も中国の歴史において絶頂期に到達したといえ、後世の人々はその諸派中の一部分を実行したに過ぎず、それにより各々がその利害を蒙った、そのためこの時代を「化成」という。中古は、三期に分けることができる。秦から三国までが、「極盛」期である。当時中国の人材は極めて豊富で、国勢は最も盛んであった、戦争において同種族が戦い、別の種族の人々は朝廷に服属していた。つまり、当時の人々の理想が実行され素晴らしい成果を得られた、そのためこの時代を「極盛」という。晋から隋までが「中衰」期である。当時外国の異民族が侵入し、政権を掌握し、また宗教も外国の宗教の変化に大きく影響され、そのためこの時代を「中衰」という。唐代は「復盛」期であり、当時の国力の強さは、ほぼ漢と同等であつたが、風俗については及ばなかった。しかし後世には勝つていたため、この時代を「復盛」という。近古は二期に分けられる。五代、宋、元、明は「退化」期である。当時学識は荒れ果て、風俗は衰亡し、軍事力、財力とも徐々に低下し、次第に国家として屹立することができなくなっていた。つまり、当時の人々の理想を無理に付会したため結局成果を得られなかった、そのためこの時代を「退化」という。本朝（清朝）二百六十一年間が「更化」期

である。この時代の前半は、学問と政治が秦以来ようやく集大成され、後半の世界情勢や人心は、秦以来未曾有の状況となった。これはおそらく秦代に成立した時代の局面がすでに行き詰まり、他の局面に移ろうとしていることを意味し、そのためこの時代を「更化」という。以上が中国史の大まかな概略である。

### 〔注釈〕

（一）本文の年数は、清朝の北京遷都（一六四四年）から『最新中学教科書 中国歴史』第一冊刊行（一九〇四）までを指している。

## 第五節 歴史之益

讀我國六千年之國史、有令人悲喜無端、俯仰自失者。讀上古之史、則見至高深之理想、如大『易』然。至完密之政治、如『周禮』然。至純粹之倫理、如孔教然。燦然大備、較之埃及、迦勒底、印度、希臘、無有愧色。讀中古之史、則見國力盛強、逐漸用兵、合閩、粵、滇、黔、越南諸地爲一國、北絕大漠、西至帕米爾高原、裒然爲亞洲之主腦、羅馬、匈奴之盛、殆可庶幾、此思之令人色喜自壯者也。洎乎讀近今之史、則五代之間、我之備販、皂隸、與沙陀、契丹、狂噬交猝、衣冠塗炭、文物掃地、種之不滅者幾希。趙宋建國、稍稍稱治、然元氣摧傷、不可猝起、而醫國者又非其人。自此以還、對外則主優柔、對內則主壓制、士不讀書、兵不用命、名實相反、主客易位、天下愁歎、而不知所自始、其將蹈埃及、印度之覆轍乎。此又令人悵然自失者矣。雖然、及觀國朝二百餘年間、道光以前、政治、風俗雖仍宋明

之舊、而學問則已離去宋明、而與漢唐相合、道光以後、與天下相見、數十年來、乃駸駸有戰國之勢。於是識者知其運之將轉矣、又未始無無窮之望也。夫讀史之人、必悉其史中所陳、引歸身受、而後讀史乃有益、其大概如此。

〔現代語訳〕

我が国六千年の歴史を読むと、悲喜が限りなく、茫然自失してしまふ。上古の歴史を読む際、最も高く深い理想、例えば大『易』がそうである。極めて完成された政治、たとえば『周礼』がそうである。最も純粹な倫理、例えば孔子の教えがそうである。が燦然として大いに完備されているのを見れば、エジプト、カルディア、インド、ギリシアと比べても遜色が無かつた。中古の歴史を読む際、当時国力は強大で、次第に戦争を起すようになり、閩（福建）、粵（広東）、滇（雲南）、黔（貴州）、ベトナムの諸地域を一国とし、北は大砂漠、西はパミール高原に達し、それらが一つになってアジアの中心となった。ローマ、匈奴の盛大さと比べても、ほぼ同じであり、ここでそれを思うと、うれしくて意氣盛んとなる。近現代史を読むと、五代においては、我国において下位の者たちが沙陀、契丹などの異民族と猛り狂いながら矛を交えて、衣冠は泥や火にまみれ、文物は一掃され、種族のうち滅亡しない者はほぼ稀となった。趙宋が建てられると、ようやく「治世」と称されたが、国の活力が損なわれ、にわかに立ち上ることはできず、また国政を改めようとする者は批判を浴びることとなった。これ以降、対外的には優柔を、対内的

には圧制を重んじた。そのため士は書を読まず、軍は統制が取れず、名と実とが相い反し、主と客とが入れ替わり、天下の愁いや嘆きが、どこから始まったのかわからず、まさに（英国の植民地となった）エジプトやインドの轍を踏むことになるのではないだろうか。ここで（私は）惘然自失の状態に陥ってしまった。そうはいっても国朝の二百年間余り、道光（アヘン戦争時期）以前、政治、風俗は宋明の旧きを継承していたが、学問についてはすでに宋明から遠く離れ、逆に漢唐と合致した。道光以後、天下の情勢を見てみると、ここ数十年來、時を置かずに戦国の世になってしまう氣配がある。ここで私は時運がまもなく転じ、無窮の希望を持てることを理解する。そもそも史書を読む人は、史書の中で述べていることを究め尽くし、それを体得するならば、史書を読むことは有益となるう。歴史を学ぶ意義とは以上述べたことである。

〔訳注者後記〕

本訳稿は平成二十八年―三十一年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号一六K〇二二五四）の研究成果の一部である。